

黄遵憲における明治日本観の転換

——『日本雑事詩』の改訂をめぐって——

温 穎

一、はじめに

今から130年ほど前、「清日修好条規」という中日間の条約の締結に伴い、清国政府は何如璋かじょしょうを正使、張斯桂ちやうしけいを副使とする初代駐日公使団を派遣した。本稿で主に論じてみたい黄遵憲こうじゆんけんという人物は、この際公使団の参贊さんさん（書記官）に選ばれ来日した。

黄遵憲は、1848年、広東嘉应州に生まれた。青年時代の黄遵憲は、儒教の「四書五経」に詳しく、文才豊かな文人でありながら、因習に囚われた旧文人に反発してやまない人物だったのである。1870年、外の空気を吸いたかった黄遵憲は、科挙試験を受験するために、初めて広州へ行き、後、北方へ向かって遊歴した。特に北京での洋務・外交関係の官僚との交遊は、彼の人生に大きな影響を与えたのである。1876年、黄遵憲は科挙試験に合格した。この年、同じ広東客家系出身で、駐日公使に選ばれた何如璋から誘われて、三十歳の黄遵憲は外交官の道を選び、日本に渡ったのである。そして又、それをきっかけに、後々彼はアメリカ・イギリス・シンガポールに転任し、外交生涯を続ける事となった。1894年帰国後、黄は任地の湖南省で新政をたすけ、それが後の戊戌変法運動にもつながったのである。しかし運動失敗後、黄は清政府より軟禁され、閉門著書の生活を送った。

四年余り（1877年11月－1882年1月）の日本駐在体験は、黄遵憲の思想の基礎を固めることとなったとされている。黄は初めての海外体験を味わいながら、数多くの日本人の知り合いから啓発を受け、明治維新後の日本社会を興味深く観察したのである。その成果として、『日本雑事詩』と『日本国志』という二つの大著が書き残され、近代中国人による本格的な外国研究書の白眉とされている。その中の日本認識は、日本に関する知識にたいへん乏しい晩清の中国人にとっての「明治維新史」とされ、当時の皇帝まで、黄遵憲の著作を求めたのである。1898年、中国の維新運動＝戊戌変法が興った際、『日本雑事詩』と『日本国志』は運動のテキストとなり、中国の近代化および中国人の日本観に大きな影響を与えたと思われる。

二、『日本雑事詩』の改訂

興味深いことに、姉妹編とよばれたこの二つの著作＝『日本雑事詩』と『日本国志』には、意見の矛盾はところどころ見られる。また、『日本雑事詩』という詩集だけを見ても、幾つかの版本の間で相違点があることは否定できない。そしてその理由を究明するてがかりは、『日本雑事詩』の自序にあったのである。

「日本は、ちょうど明治維新のはじめであって、すべての制度は、できあがったばかりで、…わたしが交際した人たちには旧学者が多く、その人たちの新時代に対する皮肉や非難が、わたしの耳に、みちあるれるという有様であった。…新旧意見の違いは、時には、この詩の中に、現れている。」

「わたしの閱歴が次第に深くなり、見聞が次第に広くなって、…初めて西洋の法にしたがって、故きをあらため新しきを取り入れたればこそ、日本は卓然として独立するができたのである、と信ずるようになった。そこで『日本国志』の序・論は、…ややもすると『雑事詩』の意見と矛盾するものがあつた。」¹

なるほど、黄遵憲はここで、『日本雑事詩』を改訂した理由を述べた。一つ看過できない問題は、『雑事詩』の改訂は、言葉の修正よりも、黄遵憲の日本認識の発展によって行われた内容中心の改訂だということである。特に、彼はその明治維新観の転換を自覚して、三つの主な理由をまとめた。先程述べたように、黄遵憲の著作は中国の近代化および中国人の日本観に大きな影響を与えたとすれば、その明治維新観は中国近代思想史・中日交流史においてたいへん重要な問題となると言えよう。それでは、『日本雑事詩』という詩集の改訂を通じて、黄遵憲の明治維新観がどういうふうに変換したのかのプロセスを見てみよう。

まず『日本雑事詩』について簡単に紹介させていただく。構成から言えば、『雑事詩』は詩文と注の二部からなっており、その内容は日本明治維新後の政治・経済・社会・学術・民俗など多くの分野にわたっている。版本については、作者は決定版で「今回の発行は九回

目だ」と述べてあるけれども、出版されて、今日に保存されている版本は、1879年初版と、1890年の改訂を経て、98年に出版された決定版の二種類のみである。初版と決定版を比較すると、『日本雑事詩』の改訂はおおよそ削除・増補・改稿の三種類に分けることができる。後者二種類の新たな部分には黄遵憲における明治維新観がまともって反映されており、より重視すべきである²。本稿では、主に次のような文献をそれぞれ、原文と訳文の底本として、『日本雑事詩』初版と決定版の相違をまとめてみた。

☆ 本稿で主に使われた底本（いずれも第一行目の文献のほうを主に参考した）

❖ 中国語：

『走向世界叢書 日本雑事詩（広注）』（鐘叔河編 岳麓書社 1985）

『黄遵憲集』（黄遵憲著 吳振清・徐勇・王家祥整理 天津人民出版社 2003）

❖ 日本語：

『日本雑事詩』（黄遵憲著 実藤恵秀・豊田穰訳 平凡社 2003）

『中国詩人選集第二集 黄遵憲』（島田久美子著 岩波書店 1964）

☆ 『日本雑事詩』初版と決定版の相違

◇ 改稿の詩・注（49首）：

立国（1） 徐福（5） 旧暦（13） 新暦（14） 西京（17） 風俗（19） 地震（25） 官制（31） 印紙（37） 官契（38） 煙酒税（39） 錢幣（40） 法律（43） 消防局（47） 統計表（52） 新聞紙（53） 学校科目（56） 幼稚園（60） 漢字（63） 仮名（64） 四十七字母（65） 漢文読音（66） 佚書（68） 詩人（76） 漢詩盛衰（77） 日蓮（82） 常世虫（85） 嫁粧（92） 贅婿（94） 葬儀（98） 女子（103）

外室（105） 芸者（107） 官許（108） 料理屋（109） 揚弓店（110） 園亭（114） 浴池（117） 新年（133） 羽子板（134） 尋常茶飯（148） 山鯨（151） 劉二郎（158） 芝居（160） 樂器（161） 漢医流派（165） 鏡写真（175） 人力車（181） 隼人（182）

◇ 増補の詩（49首）：

政党（7） 牢獄（45） 警視（46） 古文字（61） 五十音（62） 蔵書（79） 親鸞（81） 天主教（84） 新嘗祭（86） 四親廟祭（87） 大嘗祭（88） 親王内親王（89） 訂婚（90） 合巹（93） 妻屋（96） 葬事（97） 居葬（100） 仏事（102） 夫

婦（104） 冶遊（106） 楊花（111） 習槍所（118） 桜餅桜茶（123） 梅児（124） 囲花会（125） 落語（126） 雑技（128） 歳時（135） 冠位（136） 髪式（138） 月代（139） 蓄鬚（140） 泥屋頂（146） 江戸香（147） 琼芝（149） 堅魚（150） 唐菓子（152） 雅楽寮（153） 猿楽（154） 舞（157） 三味線（159） 水蛭療疾（166） 按摩法（167） 本草学（168） 小笠流（170） 潑墨法（174） 博覧会（178） 花果（186） 七宝焼（193）

* 『走向世界叢書 日本雑事詩（広注）』（鐘叔河編 岳麓書社 1985）を参照したうえで作ったものである。括弧の中の数字は決定版での番号である。

中国では、1930年代以来、中国近代思想史・中日交流史などの角度から、『雑事詩』の改訂を取り上げたり、考察を加えたりした先行研究は少なくない。その共通論点の一つとして、黄遵憲は、日本在任の後期（初版〔1879年〕～離日〔1882年〕）に、すでに思想変化がおこった、という考えが挙げられる³。

- ◇ 周作人『日本雑事詩』（『逸経』第3期 1936）
- ◇ 鐘叔河『黄遵憲及其日本研究』（『走向世界叢書』1985）
- ◇ 鄭海麟『黄遵憲与近代中国』（三聯書店 1988）
- ◇ 嚴安生『黄遵憲の日本論』（『日本学論叢』1994）
- ◇ 王颺『從「日本雑事詩」的修改看黄遵憲思想的發展』（『黄遵憲与近代中日文化交流國際學術討論會論文集』2001）
- ◇ 実藤恵秀『『日本雑事詩』注』（『日本雑事詩』黄遵憲著 実藤恵秀・豊田穰訳 平凡社 2003）

では、黄遵憲の駐日時代にさかのぼり、一近代中国人の思索軌跡をたどってみよう。

三、新聞紙：「未敢雌黄信口評」から「九流百家無不有」へ

初めての外国駐在とはいえ、黄遵憲は、来日早々、祖国改造、新政を興すための参考資料を作ろう、という外交官としての責任意識を持ちはじめた。そのため、彼は近代日本の進取の精神と現実の歩みを巨視的に把握しながらも、天文・地理・国勢・政治・経済や文化・学術・芸術・物産の各方面にわたって観察し、書き記していった。『雑事詩』初版第50番の「新聞紙を詠む」はまさにこの一例といえよう。

一紙新聞出帝城	一紙の新聞 帝城に出で
伝来令甲更文明	ほうりつ 令甲を伝来して更に文明
曝簪父老私相語	のんざき ひなたぼっこ 簪に曝せる父老
	ひそか 私に相語り
未敢雌黄信口評	まだ敢えて雌黄 口に信 せて評せず

注：

新聞紙は山奥でも海のはてでも、いたらざるところがない。時事問題をしり、是非の説を公開するのは、たいへんけっこうなことである。しかし、西洋人は、すべてのことを、みなこれによって達成しているから、さらに政治を誹謗したり、個人の過ちを非難するものに対する法律をもうけて、その放縱になるのを防いでいる。罪の軽いものには罰金、おもければ監禁の刑にあてられる。日本はみなそれにならっている。

日本の新聞紙で、時事問題を論ずるものは、しきりに文明とか開化とかいうことをいっている。⁴

*詩歌及び詩注の日本語訳は『日本雑事詩』（黄遵憲著 実藤恵秀・豊田穰訳 平凡社 2003）による。下線部と括弧は筆者より、以下同じ。

☆ 黄遵憲の新聞観

黄遵憲来日の1877年までの中国では、近代的新聞は既に現れたが、形式・内容とも簡単なものに過ぎず、新聞の数と言っても、上海で創刊された『申報』・『新報』など三・四種があるだけだった。ということで、黄遵憲を含めた当時の多くの在日中国人にとって、新聞は目新しいものといえる。一方、当時の日本の新聞業界は、成長の勢いを見せた。

1863年に発足した日本の新聞は、戊辰戦争の特需で活気を見せはじめ、後の政府のさまざまな禁令とは裏腹に、いち早く発展を遂げた。1877年黄遵憲来日の時、日本の新聞業界は70年代半頃の新聞条例や讒謗律による制限を受けていながらも、盛況を呈した。

「随員としては、社会調査などをして、朝廷の政策決定に情報提供しなければならない⁵」という使命感を抱いていた黄遵憲は、早くも中日新聞業界のギャップに気づき、調査を始めたのである。その資料収集⁶についてここでは省略するしかないが、彼による新聞紙の広範性・現実性・情報公開性についての記述は、明治15年、日本人の小池洋二郎の新聞論⁷にも裏付けられるように、新聞の基本状況を把握したと言っているであろう。

だが、新聞のメリットを認識した黄遵憲は、すぐさま納得し、受け入れようとはしなかった。彼は新聞に

対して「慎重」な態度をとっていたのである。詩歌の本文からもわかるように、黄遵憲は、新聞の役割を「法律を伝来して更に文明」、つまり文明開化の宣伝道具に過ぎないと思ひ、また「軒先に日向ぼっこをしている老人はお互いに語り、未だ敢えて口に任せてその是非を評せず」という一句からわかるように、新聞は世論を反映したり、政治を議論したりするメディアとしての役割を果たしているとは考えなかったのである。

☆ 「文明開化」への皮肉

新聞観から窺えるのは、黄遵憲の「文明開化」に対する態度である。彼は注で、「日本の新聞紙で、時事問題を論ずるものは、しきりに文明とか開化とかいうことをいっている」という、皮肉を帯びた字句さえ書き記したのである。明治維新を支えてきた「文明開化」は、「上から下へ」という通路を経て民衆に伝わったと黄遵憲は考えていた。そのため、単なる政府の宣伝道具に過ぎない新聞紙に対して、彼は慎重な態度をとっていた。実際、『日本雑事詩』初版においては、「新聞紙」と同じように、明治維新後の日本社会、特に「西洋＝文明」という図式的な「文明開化」の風潮を風刺する詩歌はほかにも数多く見られる⁸。

注意すべきことに、『日本雑事詩』初版は、黄遵憲来日三年目に出版されたもので、思慮未熟や先入観は免れることはできない。しかも、清末文人という立場は、色々な意味で思想の限界をもたらしたのである。幼少時代から馴染んできた儒教の教え、侵略された国の一員として、自ずからわきおこった西洋に対する敵対心などによって、多くの清国知識人は、盲目的に自己満足しながら、中国以外の世界を無視、或いは軽視してきた。すでに廃頹した清国を依然として世界の中心とする国内の儒者はいうまでもなく、せつかく海外へ行くチャンスを得た知識人でさえも、外国の文化を取り入れようとする向上心すら持っていなかった。それに、来日早々から多くの旧文人に囲まれ、知らないうちにだんだんその影響をうけ、明治維新を批判したり、政治と縁遠い「いき」の世界に逃げたりして、見物遊山の旅行記や猟奇趣味からの文章しか残せなかった⁹。現に、当時、「山奥でも海のはてでも、いたらざるところがない」この新聞紙については、黄遵憲以外に、それを取り上げた在日中国人はほとんどいなかったのである。

話は少し逸れたが、以上の背景から、新事物に探究心を持っており、救国の使命感をも抱いている黄遵憲は、明治維新後の「文明開化」に見られた「西洋一辺倒」の傾向を飲み込めなかった。彼は、西洋を全面承

知するような日本の「文明」に、物足りなさを感じたのである。現に、彼は「新聞紙」という詩歌の本文で、西洋の新聞条例を紹介した後、「日本はみなそれにならっている」という一句を設け、嘆かわしい気持ちを表した。「西洋＝文明」という世論の風潮の中にあるからこそ、新聞は単なる政府からの命令や法律を伝達するのではなく、さらに言論の力を発揮し、国民の知恵を啓発すべきではないかと、黄遵憲は新聞のもう一つの可能性を提示したのである。『日本雑事詩』が成立した後の1887年に発行された黄遵憲のもう一つの日本研究書『日本国志』で、黄遵憲は「新聞は内外の事情をならべて論じ、それによって人の知恵を啓いている」ような表現を繰り返していた¹⁰。次節で触れる内容だが、帰国後自ら新聞を発行した時、黄遵憲は「西洋雑誌の翻訳に重点を置く」という意見を退け、「力強い政論を以て、国民の知恵を啓発し、目覚めさせる」ことを新聞のモチーフとした。

結論を先に言ってしまうと、新聞紙に潜んでいる言論の力を認識した黄遵憲は、後に、言論の自由を保護し、中国の維新運動に役立たせようとした。その思想的プロセスをあらわす証拠として、1898年の『日本雑事詩』決定版では、「新聞紙」という題名こそそのままであるが、それ以外は詩から注に至るまですべてにわたって書き直している。

欲知古事讀旧史	古事を知らんとすれば 旧史を讀め
欲知今事看新聞	今事を知らんとすれば 新聞を看よ
九流百家無不有	<small>きゅうりゅうひゃつか</small> <u>九流百家</u> あらざるはなく
六合之内同此文	<small>りくごう</small> <u>六合 [宇宙] の内</u> <u>この文を同にせん</u>

注：

新聞紙は時事問題を講究し、四方にあまねく知らせるもので、五大州万国のことで登載しないものはない。もし新聞問題がおこると、朝電報をうてば、夕にはもはや印刷されている。家から一步も出ないで、世界の事件を知ることができる、とあってよい。その源は邸報から出ており、その体裁は叢書に似ているが、体裁が大きくて用途がひろい、という点では、はるかにこれ以上である。¹¹

☆ 新聞観の発展

二首の「新聞紙」に現れた思想は明らかに違ってい

る。初版では、新聞紙に対する慎重な態度をよくあらわし、新聞の役割を、上から下へという宣伝の道具にすぎないというふうに書いている。それに対して、決定版では、新聞紙の普及性（「六合之内同此文」、即時性（「朝電報をうてば、夕にはもはや印刷されている」、便利性（「家から一步も出ないで、世界の事件を知る」といった長所を全面肯定し、さらに、今日の事を知ろうとすれば、新聞を読もうと（「欲知今事看新聞」、積極的に呼びかけたのである。ここでは、新聞の役割は、「九流百家 あらざるはなく」とあるように、様々な言論を承認し、自由に発させる場として機能しているように書いている。彼は、政治・社会を自由に議論し、意見を公開することができる日本の新聞に賛美の意を表しているのである。

☆ 「言論自由」への全面肯定

初版の1879年から決定版の1890年までの12年の間に、中日両国とも大きな変化を遂げた。黄遵憲の思想変化も、日本在任後期（1879年—1882年）の経験をベースとしたものである。

まず日本では、1870年代末頃から自由民権の声がますます大きくなり、国会開設運動が人々の関心を引いた。人々は路傍演説・聯合協議会など、様々な方法で自分の権利を主張し、それに対して政府は集会演説に警戒をはかり、言論干渉を構えた。

それと同時に、既に崩壊しつつある清末の中国を救おうと、様々な運動が湧き起こっていたのである。西洋の技術を勉強しようとする洋務運動が興隆を迎え、また、維新を通じて自立を図ろうとする維新運動もその準備段階に入った。1888年に著名な政治家である康有為が、言論の公開を唱え、それによって変法を図ろうとすることを朝廷に勧めた。そしてその後、運動のための組織を作り始めた。

黄遵憲は、その時外国に駐在していたが、いろいろな方法で中国の維新運動の情報を手に入れ、救国の道を考えていた。自由民権思想を受け入れ、言論自由の重要性を感じ取った彼は、新聞紙一枚から、言論の力を認識し、中国の維新運動で機能させようとした。

☆ 『時務報』の発行

このような認識の結実として、1895年の帰国時には黄遵憲はすでに新聞を創刊しようという考えを持っていた。彼は親友の梁啓超への書簡で、「わが民衆これほど無知なのを目にすると、…（中略）新聞を借りて彼らを啓発して救いたいと思うのだ」¹²とあり、そのため、1896年に維新派の団体である強学会が政府より禁

止されると、黄遵憲は即座に「自ら千円を設立費として寄付」したのである。これが中国近代新聞史上に名を馳せる『時務報』である。『時務報』が成立した早期から、黄遵憲は「力強い政論を以て国民を目覚めさせる」ことを新聞の主旨とし、維新思想を議論する場を提供し、後におこった戊戌変法運動を促したのである。この一件からはまさしく黄遵憲が明治維新観から出発して最終的に到達した思想的な高さを見ることができよう。

四、 今後の課題と展望——むすびに代えて

以上は主に「新聞紙」という詩歌について検討してみたが、しかし、西洋器物に対する態度だけでは、黄の明治認識を十分に説明できないことは言うまでもない。これからの課題は、それぞれ黄遵憲の明治学術観と民俗観を反映したと考えられる決定版第 77 番の詩と、決定版で新たに付け加えられた民俗についての詩歌を通じ、黄遵憲における明治維新観の転換を全面的に検討し、また黄遵憲の思想を相対化する広い視野で、その日本認識の変化を捉えていきたいと思う。

注

- 『日本雑事詩』（黄遵憲著 実藤恵秀・豊田穰訳 平凡社 1994）P5 を参照。原文は次のようである。「時値明治維新之始、百度草創、規模尚未大定。（中略）余所交多旧学家、微言刺譏、謔差太息、充溢於吾耳。（中略）新旧同異之見、時露於詩中。及閱歴日深、聞見日拓、頗悉窮變通久之理；乃信其政從西法、革故取新、卓然能自樹立。故所作『日本国志』序論、往々と詩意相乖背。（中略）嗟夫！中国士夫、聞見狹陋、於外事向不措意。今既聞之矣、既見之矣、猶復飾古義、足己自封、且疑且信；逮窮年累月、深稽博考、然後乃曉於是非得失之宜、長短取捨之要、余滋愧矣！」『走向世界叢書 日本雑事詩（広注）』（鐘叔河編 岳麓書社 1985）P571 を参照。
- 夏曉虹著 藤沢太郎訳「黄遵憲と明治社会」『アジア遊学 13 中国人作家の帝都東京体験』PP. 5-21（勉誠出版 2000）を参照。
- 『「日本雑事詩」注』（黄遵憲著 実藤恵秀・豊田穰訳 平凡社 1994）P310 を参照。括弧の中の内容は筆者による考えである。
- 原文：「新聞紙、山陬海濱無所不至、以識時務、以公是非、善矣！然西人一切事皆藉此以發達、故又有誹謗朝政、詆毀人過之律、以防其縱。輕議罰鍰、重則監禁。日本皆倣行之。新聞紙中述時政者、不曰文明、必曰開化。」原文は『走向世界叢書 日本雑事詩（広注）』（鐘叔河編 岳麓書社 1985）を参照、以下同じ。
- 張偉雄『文人外交官の明治日本』（柏書房 1999）P20 を参照。

- 王曉秋『黄遵憲「日本国志」初探』（『中日文化交流史話 山東教育出版社 1991）、劉雨珍『「日本国志」前言』（『日本国志』上海古籍出版社 2001）、伊原沢周『「日本国志」編写的探討——以黄遵憲初次東渡為中心』（『近代史研究』1993年第1期）、実藤恵秀『日本雑事詩』注（黄遵憲著 実藤恵秀・豊田穰訳 平凡社 1994）などを参照。
- 小池洋二郎『日本新聞歴史』（明治文化研究会編『明治文化全集 第四巻 新聞篇』PP. 28-48 日本評論社 1968年）を参照。
- その証拠の一つとして、『日本雑事詩』初版第6番の「明治維新」が挙げられる：

劍光重弘鏡新磨	劍光かさねて払い 鏡新たに磨き
六百年来返太阿	六百年来
	太阿（おおむかし）に返る
方戴上枝帰一日	方（まさ）に上枝を戴き
	一の日に帰するも
紛紛民又唱共和	紛紛として 民また共和を唱う。

 詩注（訳文）：中古の時代には、明君・良相が歴史にたえず書かれているが、やがて外威が政をもつばらにし、覇者がたがにおこり、源平以後は、まるで周が東遷して君は虚位を擁するのみであるとおなじであった。明治元年、徳川氏が廃せられ、はじめて皇政復古をみた。中興の功、偉なるかな。ところで、ちかごろは、西洋の学問が大いにおこなわれ、かえってアメリカ合衆国の民権自由の説をとるものがある。
- 当時の中国人による日本遊記は、『走向世界叢書』（鐘叔河編 岳麓書社 1985）、『走向世界叢書叙論集 従東方到西方』（鐘叔河著 岳麓書社 2002）などを参照。
- 『日本国志』「學術志」（黄遵憲著 呉振清・徐勇・王家祥整理 天津人民出版社 2005）を参照。
- 原文：「新聞紙以講求時務、以周知四国、無不登載。五洲万国、如有新事、朝甫飛電、夕既上板、可謂不出戸庭而能知天下事矣。其源出於邸報、其体類乎叢書、而体大用博、則遠過之也。」
- 光緒 28（1902）年 11 月 11 日付、「黄遵憲致梁啓超書」『中国哲学』第八輯 P367（三聯書店、1982年）を参照。

参考文献

単行本：

- 『黄遵憲与近代中国』（鄭海麟著 三聯書店 1988）
 『近代中日關係史研究』（王曉秋著 中国社会科学出版社 1997）
 『近代中日文化交流史』（王曉秋著 中華書局 2000）
 『走向世界叢書叙論集 従東方到西方』（鐘叔河著 岳麓書社 2002）
 『黄遵憲与近代中日文化交流國際學術研討會論文集』（北京市中日文化交流史研究会編 2001）
 『黄遵憲師友記』（蔣英豪著 上海書店出版社 2002）
 『文人外交官の明治日本』（張偉雄著 柏書房 1999）
 『江戸・明治期の日中文化交流』（浙江大学日本文化研究所編 農文協 2000）
 『新聞集成明治編年史 2-4 巻』（中山泰昌 編著 昭和 57 年 本邦書籍）

論文：

「黄遵憲の日本論」(厳安生 『日本文学論叢』 北京外国語大学日本語学部学部編 高等教育出版社 1994)
「黄遵憲と明治社会」(夏曉虹著 藤沢太郎訳 『アジア遊学

13 中国人作家の帝都東京体験』PP. 5-21 勉誠出版 2000)

「日本新聞歴史」(小池洋二郎 明治文化研究会編『明治文化全集 第四巻 新聞篇』PP. 28-48 日本評論社 1968)

おん えい／北京日本学研究センター 修士2年